

論文

台湾多文化家族の夫の日常生活に関連した ストレス問題

尹 靖水¹⁾・百瀬英樹²⁾
黒木保博³⁾・中嶋和夫⁴⁾

要約：本研究は、台湾における多文化家族の夫を対象に、彼らの日常生活に関連した「苛々感 (Irritated feeling)」（ネガティブなストレス認知）と精神的健康（ストレス反応）の関連性を明らかにすることを目的に行なった。調査対象は、台北市、高雄市、台北県、桃園県に在住する多文化家族の夫 200 人とした。調査内容は、属性（夫の現在と結婚時の年齢、宗教、学歴、収入、結婚に至った経過、現在の妻との結婚継続期間、ならびに妻の現在と結婚時の年齢、国籍、宗教、学歴、台湾語の習得状況）、日常生活に関連した苛々感、精神的健康で構成した。回収された 186 人（回収率 93.0%）のデータを基礎に統計解析を行なった。4 種類の変数（夫婦の年齢差、夫の収入、結婚継続期間、妻の台湾語の習得状況）を統制変数とし、また夫の日常生活に関連した 3 種類のそれぞれの苛々感（下位因子：妻に対する否定的感情、家族・近隣に対する否定的感情、経済的な逼迫感情）を独立変数、GHQ-12 で測定された精神的な健康状態を従属変数とする因果関係モデルのデータへの適合性を、構造方程式モデリングで解析した。その結果、前記の因子別に検討したそれぞれの因果関係モデルは統計学的に有意な水準でデータに適合した。統制変数の影響を考慮したときの多文化家族の夫の日常生活に関連した苛々感の精神的健康に対するパス係数の程度は、「妻に対する否定的感情」が 0.376、「経済的逼迫感情」が 0.271、「家族・近隣に対する否定的感情」が 0.255 の順であった。以上のことから、多文化家族の夫の精神的健康の維持・増進にとって、日常生活に関連したストレス問題を、社会福祉学的な観点からみた生活問題すなわち生活ニーズと位置づけ、積極的に介入することの重要性が示唆された。

キーワード：台湾、多文化家族の夫、ストレス問題、否定的感情、精神的健康

目次

- I. 緒言
- II. 研究方法
- III. 研究結果
 - 1. 属性分布
 - 2. GHQ-12 の因子構造モデルのデータへの適合性と得点分布

¹⁾ 梅花女子大学現代人間学部、同志社大学社会学部嘱託講師

²⁾ 世信大学日本語文学系

³⁾ 同志社大学社会学部

⁴⁾ 岡山県立大学保健福祉学部

*2011 年 4 月 28 日受付、2011 年 6 月 29 日掲載決定

3. 夫の日常生活に関連した苛々感と精神的健康の関係

IV. 考察

I. 緒言

最近、国境を越えたヒトの移動が活発化している⁽¹⁾。台湾においては、1980年代の戒厳令解除を契機に外国人が急増し、最近までに、約36万人の移住労働者に加えて、中国大陸・東南アジアを中心とした累計40万人以上の外国籍配偶者（新移民女性）が居留している⁽²⁾。同様に外国籍配偶者は東アジア圏に位置する韓国や日本でも顕著な増加が認められ、特に、農漁村部と都会の下層労働者の男性において増加していることが共通点となっている。従来の欧米における異文化間ストレス研究の知見⁽³⁾⁻⁽⁷⁾に従うなら、多文化家族を構成している外国籍配偶者のみならず、それら女性と結婚した東アジア圏の男性も家族形成を継続する中で多くのストレス問題に直面しているものと推察される。多文化家族のストレス問題に関連して、韓国では2000年代に、多文化家族の妻を対象としたストレスに関連した実証的な研究が進められている⁽⁸⁾⁻⁽¹³⁾。それに対し台湾では、1990年代中頃から「グローバル化に伴う移民の商品化」⁽¹⁴⁾が問題視され、夏曉鵬の「国際結婚の商品化」に関する研究が嚆矢となって⁽¹⁵⁾、フェミニズムや社会運動の立場から飛躍的に結婚移民に関する研究が増加した経緯がある。その主な内容は、1) 金門県の大陸籍配偶者を対象に参与観察とインタビューを通じて環境適応における調整のプロセスを分析し、習慣、言語、経済、家族文化の相違などの問題点を明らかにした徐源生の研究⁽¹⁶⁾、2) 台中縣市・彰化県の大陸籍女性配偶者を対象にアンケート調査と聞き取り調査を実施、彼女たちの生活適応問題に関して因子分析を行い、文化適応や生活適応よりもむしろ、身分証、出入国、就業など政策上の制限に対してストレスを感じていることを明らかにした簡孟嫻の研究⁽¹⁷⁾、3) 2名のベトナム籍とインドネシア籍の新移民女性配偶者をインタビュー調査対象者とし、彼女たちの個人的特質、家庭生活、社会的サポートネットワークに注目して社会適応における問題点を指摘した翁慧雯の研究⁽¹⁸⁾、4) フィールドワークとインタビューを通じて、台湾家庭生活におけるベトナム籍配偶者の主観的空間認知と外的環境要因との関連に注目し、様々なコンフリクトを経て台湾の家庭生活に適応していくプロセスを記述した林依敏のモノグラフ⁽¹⁹⁾、5) 台北県新店市を居住地とする20名の新移民女性を対象に現象学的方法を用いて、來台後の生活経験や文化体験における彼女たちの主観的意味世界を描き出し、様々な葛藤や心理的変遷を整理した呂靜妮・李怡賢の研究⁽²⁰⁾などとなっている。李明堂と黄玉幸も指摘している⁽²¹⁾ように、台湾の多文化家族に関連する研究は、量的研究は少なく、深層インタビューや半構造化インタビューなどの調査法を用いた質的研究が主流となってい

る⁽²²⁾。同様に、新移民女性の台湾籍男性配偶者に関して言えば、台湾籍男性が外国籍女性を結婚相手として迎えるに到った経済的・社会的背景、「男性気魄」という男性性規範や父権主義的伝統家族規範と夫婦の相互関係及び結婚生活過程に注目した質的研究がなされている⁽²³⁾⁻⁽²⁶⁾。すでに李俊豪らが指摘しているように、「新移民女性配偶者の周辺化を回避するためには、彼女たちの台湾社会への認識を高めることだけに注目するのではなく、台湾本籍人の多文化的認識を高め、新移民家族の多文化化を促さなければならない」⁽²⁷⁾にも関わらず、新移民女性にとっての受け入れ社会側の「窓口」ともいえる「台湾籍先生（台湾国籍の夫）」に関する研究は極めて不十分である。他方、従来の韓国の多文化家族の妻（及び夫）のストレス問題に関連した研究の問題点⁽⁸⁾⁻⁽¹³⁾を方法論的な側面から整理すると、その多くは、第一に、ストレス認知過程を構成する（潜在的）ストレッサー（latent）stressor、ストレス認知 perceived stress（ストレス評価 appraisal stress）、ストレス反応 stress response⁽²⁸⁾⁻⁽²⁹⁾等の要素の区別に曖昧さを残したまま議論を展開している。欧米や日本の従来の家庭内暴力や虐待に関する研究は、日常生活、育児、さらには介護に伴うネガティブなストレス認知が、家庭内暴力、児童虐待、高齢者虐待等の家族員による不適切な行動と密接に関連している⁽³⁰⁾⁻⁽³³⁾ことを報告している。従って、多文化家族の夫のストレス問題を解明し社会福祉学的な介入によってそれらを解消することは、多文化家族の家庭内暴力や家庭崩壊のリスクの軽減に貢献するものと想定されよう。にもかかわらず、さらに従来の多文化家族の妻を対象としたストレス研究⁽⁸⁾⁻⁽¹³⁾では、前述のストレスを構成する要素の曖昧な扱いに関する問題に加えて、第二に、研究課題として設定されている実証すべき仮説が、帰納的仮説なのか演繹的仮説なのかが適切に区別されていないという問題を内包している。このことは従来の研究知見に関するレビューが不適切なことを意味し、従って研究成果が学問的にどのような意義を持っているかが不明確にならざるを得ないことと関連している。加えて第三に、前記仮説の検証において適切に対応する統計処理、たとえば、前記ふたつのいずれの仮説であっても統計学的には仮説として設定された因果関係モデルの適切さが構造方程式モデリングによって解析可能にも関わらず、そのような統計解析を使用した研究はほとんど見あたらない。このことは個々の要素間の関連性は実証できても、仮定された因果関係モデルの普遍性が十分指示されないことを意味している。さらに、仮説を実証的に検討する場合、一般的には、仮説に含まれる因果関係をより適切な形で単純化して設定し、その因果関係に導入された変数を精度高く計測することにとっては適切ではあっても、より少数の項目で構成される測定尺度を採用する研究アプローチは、たとえば、日常的に遭遇する多文化家族の夫のストレス状況をリアリティーに表現しきれない、換言するなら、専門家が具体的にどのような事柄に対して介入すべきかが、測定尺度の内容からは具体的には見えてこないと言ったような実践に深く関わる問題を惹起する。この

ような研究と実践の間で発生するジレンマを解決するために、本研究では、第一に、多文化家族の夫が日常的な生活の中で認知しているネガティブなストレス問題を可能な限り実際の生活状況を考慮した多面的な下位概念と事象（調査項目）によって構造化し、第二に、それら下位概念の概念的ならびに数量的な加算性（一次元性）を確認しつつそのストレス反応へのインパクトの程度を明らかにしていくことを課題とし、そのような学術的アプローチであってこそ、その成果をより適切に実践に反映させることが可能になるものと思料した。

以上のことから、本研究は、多文化家族の夫に対する社会福祉学的な介入に必要な基礎資料をえることをねらいとして、多文化家族の夫のネガティブなストレス認知として位置づけた日常生活に関連する「苛々感（Irritated feeling）」とストレス反応のひとつとして位置づけられる精神的健康状態との関連性を明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

本研究では、台北市、高雄市、台北県、桃園県に在住する多文化家族の台湾籍先生（台湾国籍の夫、以下「夫」と呼称する）を対象とした。調査対象として、著者らは世新大学社会発展研究所等の多文化家族に関係する諸機関の協力を得て、前記地域に在住する多文化家族の夫をランダムに200人抽出した。調査の実施に際し、著者らは調査票の配布と回収を行なったが、あらかじめ調査で得られた内容やプライバシーの保護に留意することを文書で約束し、納得できた夫からのみ回答の上、返送するよう依頼した。

調査内容は、属性、日常生活に関連した苛々感、精神的健康で構成した。属性は、夫の現在と結婚時の年齢、結婚に至った経過、宗教、学歴、月収、ならびに妻の現在と結婚時の年齢、国籍、宗教、学歴、台湾語能力、さらに家族構成、結婚継続期間とした。これらの回答は回答者である夫がすべて回答した。前記調査項目のうち、収入は月収で無収入から17万NT\$以上までの7段階で把握した。また妻の台湾語能力に関しては理解能力、会話能力、読む能力、書字能力の4側面について、たとえば理解能力の場合は「1. まったく分からない」「2. 少しは分かる」「3. だいたい分かる」「4. よく分かる」の4件法で回答を求めた。また、前記の日常生活に関連した苛々感は、これまでの著者らの相談経験等を基礎に3領域計49項目（妻との関係から発生する27項目（「妻に対する否定的感情」因子）、家族・近隣との関係から発生する13項目（「家族・近隣の人々に対する否定的感情」因子）、「経済問題」から発生する9項目（「経済的な逼迫感情」因子）で構成した。夫の苛々感の回答と得点は、「0点：全くそう感じない」、「1点：少しそう感じる」、「2点：かなりそう感じる」、「3点：とてもそう感じる」とした。精神的な健康状態は「GHQ-12」⁽³⁴⁾で測定した。

統計解析においては、多文化家族の夫の日常生活に関連した苛々感（ストレス認知）と精神的健康（ストレス反応）の関係は、構造方程式モデリングで解析した。このとき、統制変数として「夫と妻の年齢差」、「結婚継続期間」、「夫の収入」、「妻の台湾語習得状況（以下、「妻のコミュニケーション能力）」の4変数を採用し、また従属変数はGHQ-12で測定された精神的健康状態、独立変数は妻に対する否定的感情、家族・近隣の人々に対する否定的感情、経済的な逼迫感情それぞれとした。日常生活に関連した苛々感情を構成する領域ごとに配置された調査項目は、それらに対する実践的介入が必要か否かの判断材料となりうるように最大限選択して1因子モデルを仮定するものとした。ただし、仮定した1因子モデルがデータに適合しない、換言するなら、各種適合度指標が統計学的に許容範囲にない場合、あるいはパス係数に不適切な数値が観察される場合は、おおむね以下の手順で処理した。1) 各領域に所属する項目間の相関係数を算出し、その値が0.8以上で類似性が高いと想定される対の項目間において、いずれかの項目を任意に選択し、2) 再び、その因子モデルのデータへの適合性を検討するものとした。なお、「妻のコミュニケーション能力」に関しては4項目1因子モデルを仮定した。日常生活に関連した苛々感等の調査項目間の相関係数は多分相関係数 *polychoric correlation* で求めた。前記のふたつの統計処理においても因子構造モデルがデータに適合しない場合は、さらに探索的因子分析を行い、第一因子の因子負荷量もしくは仮定される潜在変数の意味的な側面を基礎に因子所属項目を決定し、その因子構造モデルのデータへの適合性を検討するものとした。上記の統計的な処理過程では、あくまでも実際の相談内容を可能な限り反映させることに主眼を置いたものであって、可能な限り適切な少数の項目で構成するといった尺度開発の手法とは異なっていることに留意されたい。前記の因子構造モデルならびに因果関係モデルのデータへの適合性は、すべて推定法として重み付け最小二乗法 *Weighted Least Squares* を採用し、適合度指標としては *Root Mean Square Error Approximation (RMSEA)* と *Comparative Fit Index (CFI)* を採用した。なお、従属変数として取り上げたGHQ-12に関しては、2件法（「0-0-1-1」採点法³⁵⁾）に変換したデータを解析に使用し（推定法は重み付け最小二乗法、相関は四分相関係数 *tetrachoric correlation* を採用）、1因子構造モデルとした。

Ⅲ. 研究結果

1. 属性分布

回収された186人（回収率93.0%）のデータを基礎にするなら、回答者（夫）の現在の年齢（有効回答：185人、99.5%）は平均43.2歳（標準偏差9.5、範囲28-80歳）、妻の現在の年齢（有効回答：185人、99.5%）は平均32.4歳（標準偏差6.2、範囲21-58

歳)であった。また、結婚時の年齢は、夫(有効回答:182人,97.8%)の平均は35.7歳(標準偏差8.9,範囲20-64歳),妻(有効回答:183人,98.4%)の平均年齢は25.8歳(標準偏差5.7,範囲17-58歳)であった。夫と妻の年齢差は(有効回答:184人,98.9%),平均10.7歳(標準偏差6.9,範囲-14~31歳)であった。現在の妻との結婚継続期間(有効回答:184人,98.9%)の平均は7.8年(標準偏差4.0,範囲2カ月-22年)であった。

結婚に至った経過の回答分布(有効回答:182人,97.8%)は、上位3位までに着目するなら、「商業的な仲介業者の紹介による結婚」が66人(35.5%),「台湾で国際結婚している友人の紹介による結婚」が31人(16.7%),「台湾で働いている家族・親戚の紹介による結婚」が30人(16.1%)の順となっていた。

「夫の月収」の回答分布(有効回答:184人,98.9%)は、「3万-6万NT\$未満」が93人(50.0%)で最も多く、「3万NT\$未満」が44人(23.7%),「6万-10万NT\$未満」が31人(16.7%),「収入なし」が10人(5.4%),「10万-14万NT\$未満」が4人(2.2%),「17万NT\$以上」が2人(1.1%)の順であった。

妻の国籍の回答分布(有効回答:186人,100.0%)は、上位3位に着目するなら、「ベトナム」が70人(37.6%),「インドネシア」が39人(21.0%),「中華人民共和国」が34人(18.3%)の順となっていた。

夫と妻の宗教は、上位3位までに着目するなら、夫(有効回答:184人,98.9%)は「仏教」が90人(48.4%),「道教」が53人(28.5%),「宗教なし」が14人(7.5%)で、妻(有効回答:549人,94.7%)は「仏教」が79人(42.5%),「宗教なし」が38人(20.4%),「カトリック」が26人(14.0%)であった。

夫と妻の最終学歴は、第一位に着目するなら、夫(有効回答:186人,100.0%)は「高校卒業」が76人(40.9%)と最も多く、妻(有効回答:184人,98.9%)は「高校卒業」が80人(43.0%)であった。

「妻のコミュニケーション能力」は、「よく分かる」に着目するなら、理解能力(有効回答:185人,99.5%)は102人(54.8%),会話能力(有効回答:185人,99.5%)は90人(48.4%),読む能力(有効回答:186人,100.0%)は33人(17.7%),書字能力(有効回答:186人,100.0%)は29人(15.6%)であった。なお、これら4項目を1因子とする因子モデルのデータへの適合性(有効回答:181人)は、理解能力と会話能力間の誤差相関を結んだところ、CFIが1.000, RMSEAが0.000で、統計学的に有意な水準を満たしていた。

家族構成(有効回答:185人,99.5%)は、上位3位までに着目するなら、「夫婦と子ども」が90人(48.4%),「夫婦と子どもと義父母(義父母のいずれでも可)」が26人(14.0%),「夫婦だけ」が25人(13.4%)の順となっていた。

表 1 対象者の基本的属性

単位：人（％），n = 186

年齢 (夫：n = 185 妻：n = 185)	夫	平均年齢	43.2 歳	標準偏差 範囲	9.5 28~80	最終学歴 (夫)	大学院卒業	1 (0.5)	
	妻	平均年齢	32.4 歳	標準偏差 範囲	6.2 21~58		未就学	8 (4.3)	
結婚時の年齢 (夫：n = 182 妻：n = 183)	夫	平均年齢	35.7 歳	標準偏差 範囲	8.9 20~64	最終学歴 (妻)	小学校卒業	31 (16.7)	
	妻	平均年齢	25.8 歳	標準偏差 範囲	5.7 17~68		中学校卒業	76 (40.9)	
夫と妻の年齢差 (n = 184)	平均	10.7 歳		標準偏差 範囲	6.9 -14~31	高等学校卒業	41 (22.0)		
						短期大学・専門学校相当の学校の卒業	24 (12.9)		
結婚継続期間 (n = 184)	平均	7.8 年		標準偏差 範囲	4.0 2 ヶ月~22 年	大学 (4 年制) 卒業	5 (2.7)		
						未就学	6 (3.2)		
結婚に至った 経路	商業的な仲介業者の紹介による結婚		66 (35.5)			小学校卒業	24 (12.9)		
	宗教団体の紹介による結婚		4 (2.2)			中学校卒業	46 (24.7)		
	台湾で働いている家族・親戚の紹介による結婚		30 (16.1)			高等学校卒業	80 (43.0)		
	台湾で国際結婚している友人の紹介による結婚		31 (16.7)			短期大学・専門学校相当の学校の卒業	15 (8.1)		
	外国人労働者として台湾に滞在し日常生活での恋愛で結婚		23 (12.4)			大学 (4 年制) 卒業	10 (5.4)		
	その他		28 (15.1)			大学院卒業	3 (1.6)		
	無回答		4 (2.2)			無回答	2 (1.1)		
夫の月収	3 万 NTS 未満		44 (23.7)			家族構成	夫婦だけ	25 (13.4)	
	3 万~6 万 NTS 未満		93 (50.0)				夫婦と子ども	90 (48.4)	
	6 万~10 万 NTS 未満		31 (16.7)				夫婦と子どもと夫婦の兄弟姉妹	12 (6.5)	
	10 万~14 万 NTS 未満		4 (2.2)				夫婦と子どもと義父母 (義父母のいずれでも可)	26 (14.0)	
	17 万 NTS 以上		2 (1.1)				夫婦と子どもと自分の親 (父母のいずれでも可)	16 (8.6)	
収入なし		10 (5.4)				夫婦と子どもと自分の親と夫婦の兄弟姉妹	13 (7.0)		
無回答		2 (1.1)				その他	3 (1.6)		
夫の宗教	仏教		90 (48.4)			妻の コミュニ ケーション 能力	理解能力	少しは分かる	15 (8.1)
	統一教会		2 (1.1)					だいたい分かる	68 (36.6)
	道教		53 (28.5)					よく分かる	102 (54.8)
	カトリック		12 (6.5)					無回答	1 (0.5)
	プロテスタント		8 (4.3)					会話能力	気楽に話せない
	東方諸教会		1 (0.5)				少しは気楽に話せる		20 (10.8)
	イスラム教		2 (1.1)				だいたい気楽に話せる		73 (39.2)
	その他		2 (1.1)				気楽に話せる		90 (48.4)
	なし		14 (7.5)				無回答		1 (0.5)
	無回答		2 (1.1)				読む能力	まったく読めない	23 (12.4)
					少しは読める	77 (41.4)			
					だいたい読める	53 (28.5)			
妻の宗教	仏教		79 (42.5)			妻の国籍	書く能力	気楽に書けない	34 (18.3)
	統一教会		2 (1.1)					少しは気楽に書ける	88 (47.3)
	道教		10 (5.4)					だいたい気楽に書ける	35 (18.8)
	カトリック		26 (14.0)				気楽に書ける	29 (15.6)	
	プロテスタント		8 (4.3)				中華人民共和国	34 (18.3)	
	ギリシャ正教		1 (0.5)				ベトナム国	70 (37.6)	
	東方諸教会		1 (0.5)				日本国	11 (5.9)	
	イスラム教		17 (9.1)				韓国	3 (1.6)	
	ヒンドゥー教		2 (1.1)				フィリピン	15 (8.1)	
	その他		2 (1.1)				タイ国	14 (7.5)	
なし		38 (20.4)			インドネシア	39 (21.0)			

2. GHQ-12 の因子構造モデルのデータへの適合性と得点分布

GHQ-12 に対する回答分布は表 2 に示した (有効回答 171 人)。この測定尺度の 1 因子構造モデルのデータへの適合度は CFI が 0.977, RMSEA が 0.093 であり, パス係数に異常値は観察されなかった。K-R 信頼性係数は 0.869 であった。なお, 精神的健康の総合得点は平均が 3.1 点 (標準偏差 3.2) で, 3 点以上を精神的に不健康とするなら, 不健康な者は 80 人 (46.8%) であった。

表2 GHQ-12 に対する回答分布

単位：人（%），n=171

質問項目	回答カテゴリ*			
	回答1	回答2	回答3	回答4
Y1 何かをする時にいつもより集中して	29(17.0)	103(60.2)	32(18.7)	7(4.1)
Y2 心配事があって、よく眠れないことは	43(25.1)	63(36.8)	21(12.3)	44(25.7)
Y3 いつもより自分のしていることに生きがいを感じる事が	51(29.8)	96(56.1)	16(9.4)	8(4.7)
Y4 いつもより容易に物ごとを決めることが	43(25.1)	101(59.1)	19(11.1)	8(4.7)
Y5 いつもストレスを感じたことが	38(22.2)	46(26.9)	33(19.3)	54(31.6)
Y6 問題を解決できなくて困ったことが	47(27.5)	57(33.3)	26(15.2)	41(24.0)
Y7 いつもより問題があった時に積極的に解決しようとする事が	55(32.2)	98(57.3)	13(7.6)	5(2.9)
Y8 いつもより気が重くて、憂うつになることは	47(27.5)	49(28.7)	22(12.9)	53(31.0)
Y9 自信を失ったことは	66(38.6)	61(35.7)	16(9.4)	28(16.4)
Y10 自分は役に立たない人間だと考えたことは	72(42.1)	69(40.4)	10(5.8)	20(11.7)
Y11 一般的にみて、幸せといつもより感じたことは	50(29.2)	97(56.7)	16(9.4)	8(4.7)
Y12 ノイローゼ気味で何もすることができないと考えたことは	69(40.4)	68(39.8)	11(6.4)	23(13.5)

*項目1：「回答1：できた」、「回答2：いつもと変わらなかった」、「回答3：いつもよりできなかった」、「回答4：まったくできなかった」

項目2, 3, 6, 9, 10, 12：「回答1：まったくなかった」、「回答2：あまりなかった」、「回答3：あった」、「回答4：まったくできなかった」

項目4, 7：「回答1：できた」、「回答2：いつも変らなかった」、「回答3：できなかった」、「回答4：まったくできなかった」

項目5：「回答1：あった」、「回答2：いつもと変わらなかった」、「回答3：なかった」、「回答4：まったくなかった」

項目8：「回答1：まったくなかった」、「回答2：いつもと変わらなかった」、「回答3：あった」、「回答4：たびたびあった」

項目11：「回答1：たびたびあった」、「回答2：あった」、「回答3：なかった」、「回答4：まったくなかった」

3. 夫の日常生活に関連した苛々感と精神的健康の関係

1) 夫の妻に対する否定的感情と精神的健康の関係

夫の苛々感を構成する「妻に対する夫の否定的感情」の回答に関して、夫と妻の年齢、結婚継続期間、夫の収入、妻のコミュニケーション能力ならびに妻に対する否定的感情に所属する項目に欠損値をもたない回答者（有効回答者159人）の回答分布は表3に示した。

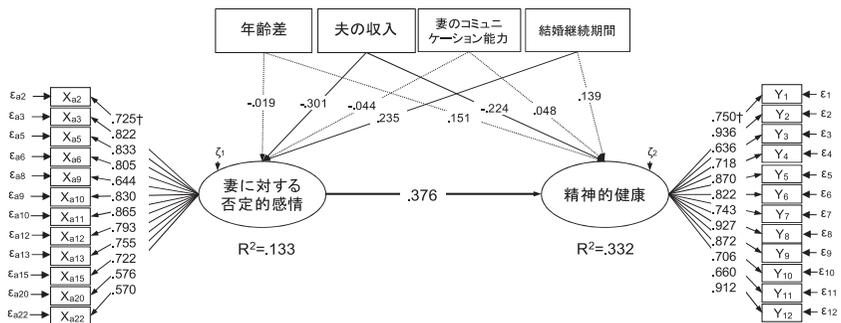
夫の妻に対する否定的感情に関連する27項目で構成した1因子モデルのデータへの適合性は、CFIが0.910、RMSEAが0.227と統計学的な許容水準を十分に満たさなかった。そこで、多分相関係数を算出し相関係数の値が0.8を超えていた1)「妻は私にほとんど関心がないので寂しい」と「妻は親身に悩みを聞いてくれないので悲しい」では後者を、2)「妻との性生活が厭わしい」と「妻は私を夫として読めないで悔しい」では前者を、3)「妻は気分のムラが激しくて気持ちが落ち着かない」と「妻は私の要求をほとんど拒否するので腹が立つ」では後者を、4)「妻が料理の手抜きをするので腹が立つ」と「妻は家事や整理整頓が下手なのでイライラする」では前者を、5)「妻は気が利かないので他人に紹介するのが恥ずかしい」と「妻は自分にやさしくないで、さびしい気持ちになる」では後者を、6)「妻は文句（小言）ばかり言うので、頭がいたい」と「妻が過ぎたことをいつまでも蒸し返すので、怒鳴りたくなる」では前者を、7)「妻が私の両親に対して気遣いをしないので気分が悪い」と「妻が私の両親と一緒に生活することをいやがっているので腹が立つ」では後者を任意に選定し、20項目で1因子を構

成した。しかし、その因子モデルはデータに適合していなかった (CFI が 0.887, RMSEA が 0.115)。そこで、さらに探索的因子分析を行い任意に選定した 12 項目で構成される 1 因子構造モデルのデータへの適合度を確認した結果、CFI が 0.936, RMSEA が 0.092 と統計学的に有意な水準を示し、仮定した潜在変数から観測変数に向かうパス係数はすべて統計学的に有意な水準にあった。

表 3 夫の妻に対する否定的感情に関する回答分布

単位：人（%），n = 159

質問項目	回答カテゴリ			
	全くそう 感じない	少しそう 感じる	かなりそう 感じる	とてもそう 感じる
Xa 1 妻の言動（ふるまい）が理解できず不愉快になる	72 (45.3)	45 (28.3)	32 (20.1)	10 (6.3)
Xa 2 理由もなく、突然、妻に怒りをぶつけたくなる	120 (75.5)	29 (18.2)	6 (3.8)	4 (2.5)
Xa 3 妻がそばにいてだけで気分が悪くなる	137 (86.2)	16 (10.1)	5 (3.1)	1 (0.6)
Xa 4 妻は私にほとんど関心がないので寂しい	126 (79.2)	28 (17.6)	3 (1.9)	2 (1.3)
Xa 5 妻は親身に悩みを聞いてくれないので悲しい	125 (78.6)	23 (14.5)	5 (3.1)	6 (3.8)
Xa 6 妻との性生活が厭わしい	144 (90.6)	12 (7.5)	0 (0.0)	3 (1.9)
Xa 7 意見が衝突するので妻との会話は楽しくない	30 (18.9)	57 (35.8)	47 (29.6)	25 (15.7)
Xa 8 妻は気分のムラが激しくて気持ちが落ち着かない	118 (74.2)	30 (18.9)	7 (4.4)	4 (2.5)
Xa 9 妻からの身体的な暴力に恐怖を感じる	150 (94.3)	6 (3.8)	1 (0.6)	2 (1.3)
Xa 10 妻の罵詈雑言（悪口）のために心が痛くなる	116 (73.0)	33 (20.8)	7 (4.4)	3 (1.9)
Xa 11 妻は私の要求をほとんど拒否するので腹が立つ	136 (85.5)	18 (11.3)	2 (1.3)	3 (1.9)
Xa 12 妻は私を理解してくれないので悲しい	105 (66.0)	46 (28.9)	5 (3.1)	3 (1.9)
Xa 13 妻の過干渉には疲れる	108 (67.9)	43 (27.0)	6 (3.8)	2 (1.3)
Xa 14 妻は私を夫として認めないで悔しい	151 (95.0)	6 (3.8)	1 (0.6)	1 (0.6)
Xa 15 妻は私を信じてくれないので悲しい	118 (74.2)	37 (23.3)	3 (1.9)	1 (0.6)
Xa 16 台湾語をきちんと覚えてないので妻に腹が立つ	141 (88.7)	13 (8.2)	2 (1.3)	3 (1.9)
Xa 17 妻の料理がおいしくないなので食欲が減退する	144 (90.6)	10 (6.3)	4 (2.5)	1 (0.6)
Xa 18 妻が料理の手抜きをしますので腹が立つ	128 (80.5)	24 (15.1)	5 (3.1)	2 (1.3)
Xa 19 妻は家事や整理整頓が下手なのでイライラする	117 (73.6)	30 (18.9)	11 (6.9)	1 (0.6)
Xa 20 妻の無駄遣いが荒くて腹が立つ	116 (73.0)	37 (23.3)	4 (2.5)	2 (1.3)
Xa 21 妻は気が利かないので他人に紹介するのが恥ずかしい	153 (96.2)	5 (3.1)	0 (0.0)	1 (0.6)
Xa 22 妻は自分にやさしくないで、さびしい気持ちになる	144 (90.6)	13 (8.2)	0 (0.0)	2 (1.3)
Xa 23 妻は文句（小言）ばかり言うので、頭がいたい	106 (66.7)	36 (22.6)	8 (5.0)	9 (5.7)
Xa 24 妻が過ぎたことをいつまでも蒸し返すので、怒鳴りたくなる	115 (72.3)	28 (17.6)	11 (6.9)	5 (3.1)
Xa 25 妻は言われている意味が分かっているのに、自分が不利になると分らないふりをしますので腹が立つ	111 (69.8)	20 (12.6)	18 (11.3)	10 (6.3)
Xa 26 妻が私の両親に対して気遣いをしないので気分が悪い	85 (53.5)	39 (24.5)	30 (18.9)	5 (3.1)
Xa 27 妻が私の両親と一緒に生活することをいやがっているので腹が立つ	93 (58.5)	28 (17.6)	32 (20.1)	6 (3.8)



n=158, CFI=.963, RMSEA=.063

図 1 夫の妻に対する否定的感情と精神的健康の関係（標準化解）

妻に対する否定的感情を12項目で構成した1因子モデルを独立変数、GHQ-12の1因子モデルを従属変数とする単回帰モデルは（有効回答者158人）、データに適合した（図1）。妻に対する否定的感情からGHQ-12に向かうパス係数は0.376で4つの統制変数のGHQ-12への関連性も考慮するなら、それらの寄与率は合計で33.2%となっていた。このことは妻に対してストレスを強く感じているほど、精神的健康が損なわれていることを意味し、同時に夫の収入と結婚継続期間は妻に対する否定的感情に、また夫の収入と年齢差は精神的健康に統計学的に有意な水準で関係していた。上記の結果は、換言するなら、夫自身の収入が低いほど、また結婚継続期間が長いほど、妻に対する否定的な感情が強いことを示唆しており、さらに夫の収入が低いほど、精神的健康に不健康なことを示唆していた。なお、年齢差と妻のコミュニケーション能力はいずれの変数に対しても統計学的に有意な関係が認められなかった。

2) 夫の家族・近隣の人々に対する否定的感情と精神的健康の関係

夫の「家族・近隣の人々に対する否定的感情」の回答に関して、夫と妻の年齢、結婚継続期間、ならびに家族・近隣の人々に対する否定的感情に所属する項目に欠損値をもたない回答者（有効回答者169人）の回答分布は表4に示した。

夫の家族・近隣の人々に対する否定的感情に関連する13項目で構成した1因子構造モデルのデータへの適合性は、CFIが0.911、RMSEAが0.319と統計学的な許容水準を十分に満たさなかった。そこで、多分相関係数を算出し相関係数の値が0.8を超えていた1)「家族が妻に家事をたくさん押し付けるので怒りが湧いてくる」と「家族が妻に優しく接しないので腹が立つ」では前者を、2)「妻が家族の一員として認められないので悲しい」と「父や母が妻を信用しないので辛い」では前者を、3)「父や母の妻に対する罵詈雑言（悪口）で心が痛む」と「父や母が妻の欠点ばかり指摘するので不愉快になる」では前者を、4)「この地域の人々はダブルに対する差別や偏見が強いので腹が立つ」と「妻が近隣の人から白い（いやな）目で見られるので怒りを感じる」では後者を、5)「妻が近隣の人から白い（いやな）目で見られるので怒りを感じる」と「近隣の人が妻や妻の国を馬鹿にしているので腹が立つ」では後者を任意に選定し、残った8項目で1因子構造モデルを構成したところ、その因子構造モデルはデータに適合しなかった（CFIが0.933、RMSEAが0.153）。そこで、さらに探索的因子分析を行い任意に選定した7項目1因子構造モデルのデータへの適合度を確認した結果、CFIが1.000、RMSEAが0.000と統計学的に有意な水準を示し、仮定した潜在変数から観測変数に向かうパス係数はすべて統計学的に有意な水準にあった。

家族・近隣の人々に対する否定的感情を7項目で構成した1因子構造モデルを独立変数、GHQ-12の1因子モデルを従属変数とする単回帰モデルは（有効回答者167人）、データに適合した（図2）。家族・近隣に対する否定的感情からGHQ-12に向かうパス

表4 夫の家族・近隣の人々に対する否定的感情に関する回答分布

単位：人（％），n=169

質問項目	回答カテゴリ			
	全くそう 感じない	少しそう 感じる	かなりそう 感じる	とてもそう 感じる
Xb 1 家族が妻に家事をたくさん押し付けるので怒りが湧いてくる	81 (47.9)	52 (30.8)	30 (17.8)	6 (3.6)
Xb 2 家族が妻に優しく接しないので腹が立つ	62 (36.7)	62 (36.7)	38 (22.5)	7 (4.1)
Xb 3 妻が家族の一員として認められないので悲しい	131 (77.5)	30 (17.8)	4 (2.4)	4 (2.4)
Xb 4 父や母が妻を信用しないので辛い	127 (75.1)	33 (19.5)	6 (3.6)	3 (1.8)
Xb 5 父や母の妻に対する罵詈雑言（悪口）で心が痛む	143 (84.6)	17 (10.1)	4 (2.4)	5 (3.0)
Xb 6 妻が外国人なので、父や母に嫌な思いをさせる	131 (77.5)	22 (13.0)	10 (5.9)	6 (3.6)
Xb 7 妻の気持ちが父や母に伝わらないので悲しい	105 (62.1)	22 (13.0)	20 (11.8)	22 (13.0)
Xb 8 父や母は妻と意見が合わないので、その問題に悩まされる	122 (72.2)	30 (17.8)	8 (4.7)	9 (5.3)
Xb 9 父や母が妻の欠点ばかり指摘するので不愉快になる	135 (79.9)	20 (11.8)	8 (4.7)	6 (3.6)
Xb 10 近所の人々が妻を無視するので不愉快になる	122 (72.2)	37 (21.9)	5 (3.0)	5 (3.0)
Xb 11 この地域の人々はダブルに対する差別や偏見が強いので腹が立つ	99 (58.6)	46 (27.2)	20 (11.8)	4 (2.4)
Xb 12 妻が近隣の人から白い（いやな）目で見られるので怒りを感じる	101 (59.8)	46 (27.2)	19 (11.2)	3 (1.8)
Xb 13 近隣の人々が妻や妻の国を馬鹿にしているので腹が立つ	107 (63.3)	42 (24.9)	17 (10.1)	3 (1.8)

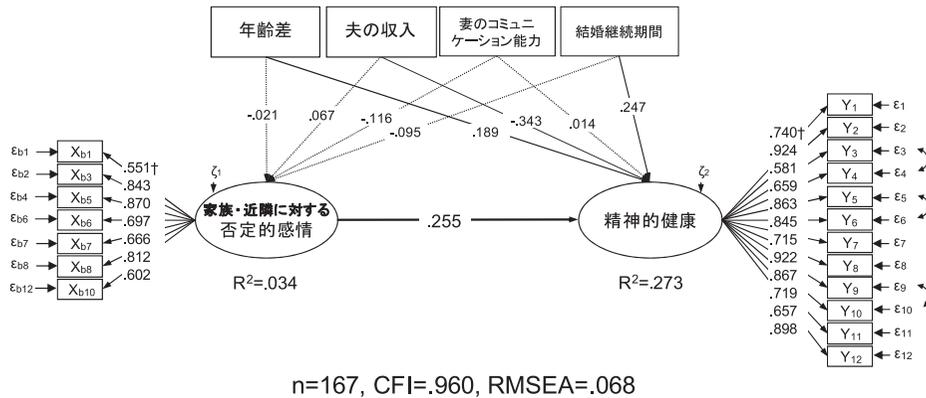


図2 夫の家族・近隣の人々に対する否定的感情と精神的健康の関係（標準化解）

係数は0.255で、他の統制変数の影響も考慮したときの寄与率は27.3%となっていた。このことは家族・近隣に対してストレスを強く感じているほど、精神的健康が損なわれていることを意味している。なお、統制変数として入れた4つのいずれの変数も家族・近隣に対する否定的感情に有意な関係を示していなかった。ただし、精神的健康には年齢差、夫の収入、結婚継続期間が有意な関係を示していた。換言するなら、夫と妻の年齢差が離れているほど、夫自身の収入が低いほど、また結婚継続期間が長いほど、精神的健康が損なわれていることが示唆された。

3) 夫の経済的な逼迫感情と精神的健康の関係

夫の「経済的な逼迫感情」の回答に関して、夫と妻の年齢、結婚継続期間、ならびに経済的逼迫感に所属する項目の回答に欠損値をもたない回答者（有効回答者171人）の回答分布は表5に示した。

夫の経済的な逼迫感情に関連する9項目で構成した1因子モデルのデータへの適合性

表 5 夫の経済的な逼迫感情に関する回答分布

単位：人（％），n=171

質問項目	回答カテゴリ			
	全くそう 感じない	少しそう 感じる	かなりそう 感じる	とてもそう 感じる
Xc1 妻の家族（自分の親や兄弟）に仕送りができず心苦しい	103 (60.2)	41 (24.0)	18 (10.5)	9 (5.3)
Xc2 趣味・スポーツ・レジャーなどを楽しむ金銭的な余裕がないので生活が楽しくない	120 (70.2)	35 (20.5)	9 (5.3)	7 (4.1)
Xc3 自分のお小遣い（自由に使えるお金）が少ないので生活が楽しくない	132 (77.2)	24 (14.0)	7 (4.1)	8 (4.7)
Xc4 日でも早く今のような貧乏な生活から抜け出したくてイライラする	131 (76.6)	20 (11.7)	7 (4.1)	13 (7.6)
Xc5 自分の収入が不安定なので将来の生活に不安を感じる	130 (76.0)	23 (13.5)	7 (4.1)	11 (6.4)
Xc6 生活必需品がほとんど買えないので悲しい	154 (90.1)	7 (4.1)	4 (2.3)	6 (3.5)
Xc7 薬や病院に行きたくてもお金がないので悲しい	155 (90.6)	7 (4.1)	2 (1.2)	7 (4.1)
Xc8 借金やローンがいつ返済できるか心配になる	120 (70.2)	32 (18.7)	6 (3.5)	13 (7.6)
Xc9 家族で外食を楽しむお金もないので寂しい	148 (86.5)	9 (5.3)	5 (2.9)	9 (5.3)

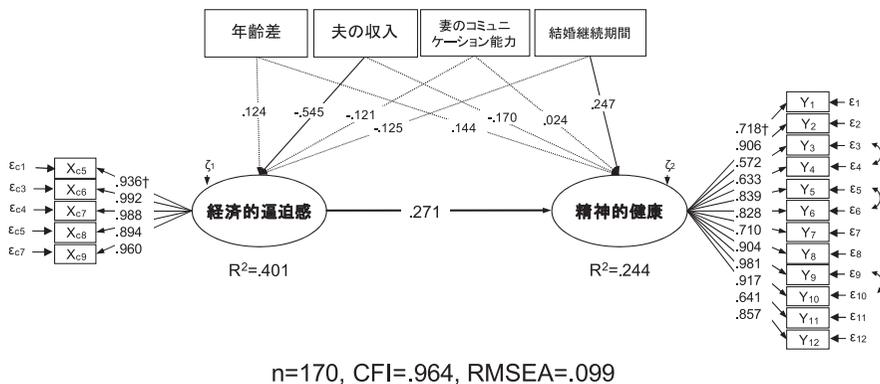


図 3 夫の経済的逼迫感と精神的健康の関係（標準化解）

は、CFI が 0.996、RMSEA が 0.102 と統計学的な許容水準を十分に満たさなかった。そこで、多分相関係数を算出し相関係数の値が 0.8 を超えていた項目を確認した結果、その多くの項目が削除され因子を構成する項目が 3 項目以下になってしまうことから、統計処理の次の段階に相当する探索的因子分析の処理に進んだ。その結果、5 項目が選定され、その 5 項目で 1 因子構造モデルを構成したところ、そのデータへの適合性は、CFI が 1.000、RMSEA が 0.000 と統計学的な許容水準を満たすものであった。仮定した潜在変数から観測変数に向かうパス係数はすべて統計学的に有意な水準にあった。

夫の経済的な逼迫感情を 5 項目で構成し、その 1 因子モデルを独立変数、GHQ-12 の 1 因子モデルを従属変数とする単回帰モデルは（有効回答者 170 人）、データに適合した（図 3）。経済的な逼迫感情から GHQ-12 に向かうパス係数は 0.271 で、他の変数も考慮したときの寄与率は 24.4% となっていた。このことは経済的な逼迫感情についてストレスを強く感じているほど、精神的健康が損なわれていることを意味する。また、夫の収入は経済的な逼迫感情に有意な関係を示しており、結婚継続期間は精神的健康に有意な関係を示していた。換言するなら、夫自身の収入が低いほど妻に対する否定的な

感情が強く、また結婚継続期間が長いほど夫の精神的健康は低下していた。ただし、夫と妻の年齢差、妻のコミュニケーション能力は、いずれの従属変数に対しても統計学的に有意な関係が認められなかった。

IV. 考 察

最近、東アジア圏（韓国、日本、台湾）では共通して年度ごとの結婚総数に占める新移民女性の割合が増加する傾向にあり、新移民女性が家族形成を継続する中で遭遇する生活問題は、通常、1) 売買婚的な結婚、2) 身分上の不安、3) 家庭内暴力、4) 貧困、5) 外国人に対する排除と偏見、6) コミュニケーション、7) 子どもの教育などに類型化されている。多文化家族の夫は日常的にそれら妻の生活問題と深く関係し、かつ夫自身も種々の生活問題に曝露されているものと推察される。しかし、従来の研究において多文化家族の夫を対象としたそのような研究はほとんど皆無となっている。多文化家族の夫婦が共同して家族形成を継続するには、当然のことながら妻のみならず夫のストレス問題を解決することも重要であり、結果的にそのことが夫の家庭内暴力や離婚等の予防にとって有効に機能することが期待される。そこで著者らは、台湾の多文化家族を対象とする社会福祉学的な介入に必要な基礎資料をえることをねらいとして、夫の日常生活に関連したストレス認知を「苛々感」と命名し、その精神的健康状態への影響を明らかにすることを目的に調査を実施した。その際、日常的に遭遇する多文化家族の夫のストレス曝露状況をよりリアリティーに表現することに主眼を置いて、可能な限り多文化家族の夫が遭遇しているストレス問題をより総合的に反映させながら、それらの概念的ならびに数量的な加算性（一次元性）を確認しつつ、その精神的健康へのインパクトの程度を明らかにすることを志向した。具体的には、多文化家族の夫が日常的に経験しているストレス問題を3領域に区分し、かつそれら領域に関連した調査項目を、適切な統計学的方法を駆使することで、因子構造モデルを構築し、それら因子とGHQ-12で測定された精神的健康との関連性を潜在変数を用いて整理した。潜在変数を用いることの利点は、要素間の関連性の希薄化を誤差を取り除くことで克服し、より正確な関係の程度が把握できることにある。また前記変数間の関係性をより正確に把握するために、バイアスとなる可能性の高い変数を統制変数として因果関係モデルに投入した。

その結果、まず第一に、台湾の多文化家族の夫の精神的な健康状態を示すGHQ-12の総合得点は平均が3.5点（標準偏差2.9）で、カットオフポイントを2/3点とするならば、3点以上の得点を示した精神的に不健康な者は46.8%を占めていることが明らかとなった。一般的には、思春期から青年期にかけての精神的な不健康状態、たとえば抑うつ症状を呈する者は成人より高く⁽³⁶⁾⁻⁽⁴⁰⁾、年齢とともに低下し、高齢者ではまた高くな

ることが指摘されている⁽⁴¹⁾。またさらに、思春期の女性で抑うつ症状を呈している者の割合が高い^{(42) - (44)}とも報告されている。本研究の結果は、多文化家族の夫の精神的な健康状態が、通常の人々に比して決して良好な状況にあるわけではないことを示唆していた⁽³⁵⁾。

第二に、台湾における多文化家族の夫の日常生活に関連した苛々感は精神的健康に対して、「妻に対する否定的感情」(パス係数 0.376)、「経済的逼迫感情」(パス係数 0.271)「家族・近隣に対する否定的感情」(パス係数 0.255)の順で影響していることを明らかにした。従来 of 精神的健康に影響すると想定されている性別や年齢等の要因^{(45) - (47)}に比して、多文化家族の夫の生活に関連したストレス問題は、彼らの精神的な健康状態に対して大きな影響力を持っていた。この結果は、視点をかえるなら、ラザルスのストレス認知理論^{(28) - (29)}が実証的に検証されたことを意味している。ストレス認知理論を援用したストレス認知とストレス反応の関連性(因果関係)を想定する仮説を導出し、その実証的な検討を志向した著者らの一連の研究は、職場問題^{(48) - (49)}、育児問題^{(50) - (51)}や介護問題^{(52) - (54)}、高齢者の機能低下問題^{(55) - (58)}等と関連したものであったが、本研究の結果はそれらと同様にストレス認知理論を支持する知見として位置づけられよう。従って、多文化家族の夫のストレス問題は、ラザルスのストレス認知理論を援用することで、さらに解明が深化させられる可能性があり、その成果は社会福祉学的な介入にとって大きな貢献をもたらすものと期待できよう。そのためには、因果関係モデルに導入する変数の正確な測定が望まれよう。加えて、本調査研究において統制変数として採用した4変数のうち、夫の収入の程度は妻に対する否定的感情と精神的健康に対して共通に影響を持っていたことを勘案するなら、さらに現実に沿った因果関係モデルの開発が望まれよう。

第三に、本調査研究では、社会福祉学的アプローチの必要性を示唆する意義深い情報が得られた。たとえば、多文化家族の夫の経済的な逼迫感情は現状の経済状況を反映するものであって、それをどのように解決するかを社会福祉学的な介入課題と位置づけ、その解決に向けての介入を積極的に展開することが彼らの精神的な不健康の快復、ひいてはウェルビーイングの改善に繋がるものと言えよう。しかし、従来の多文化家族に対する福祉施策や福祉サービスにおいては、妻に対する職業的な支援はあっても多文化家族の夫に対するそのような特別な支援はない。これは今後の多文化家族の支援にとっては重要な新たな課題と位置づけられるべきものと言えよう。また加えて、多文化家族を取り巻く環境に着目するなら、夫の両親等の言動や態度は夫自身の精神的健康を低下させる要因となる可能性が否定できないことから、今後の多文化家族に対する介入は夫婦や児に限定することなく、彼らを取り巻く多くの関係者も含めた家族単位での福祉的介入が総合的に展開されることが強く望まれよう。別言するなら、多文化家族の夫のウェ

ルベイングを維持・向上させるには、社会福祉関連の専門家が彼らが日常的に遭遇している生活問題を総合的に把握しつつ、それらを個別介入によって確実に解決すべきものと言えよう。本調査研究では、多文化家族の夫の日常生活に関連したネガティブなストレス認知を3領域で構成し、かつそれら領域には49項目を配置した。項目間の相関が高い項目は等価な項目と位置づけられることを考慮するなら、それらすべての項目に対する専門的介入の在り方が問われるであろう。特に、ストレス過程に於けるネガティブなストレス認知は、たとえば介護者にあっては高齢者虐待⁽³⁰⁾⁻⁽³¹⁾、母親にあっては児童虐待⁽³²⁾⁻⁽³³⁾と密接に関連することが知られている。従って、その知見を基礎にするなら、多文化家族の夫の生活に関連したストレス問題の解決は喫緊の課題であり、前記の多文化家族の夫のストレス認知をより正確に把握しつつ、社会福祉学的な個別介入を積極的に展開しなければならないことを専門家は強く認識すべきものと言えよう。

以上、本調査研究においては、台湾の多文化家族の夫を対象に彼らの生活に関連した苛々感と精神的健康の関連性の検討を通してストレス認知理論を支持する結果を得たところであるが、他方では、それは多文化家族の夫に対する地域福祉計画や個別介入プログラムの開発にとっても意義深い知見であった。ただし、多文化家族の夫の生活に関連したストレス問題に対する個別介入に際しては、いまだ介入のための知識や技術が社会福祉学領域では十分に確立しているとは言い難いことから、その解決に向けての研究が急務と言えよう。

引用・参考文献

- (1) 奥島美夏 (2008) 序説インドネシア・ベトナム女性の海外進出と華人文化圏における位置づけ. 異文化コミュニケーション研究, 20, 21-42.
- (2) 内政部入出国及移民署 (2007) 「各縣市外籍配偶人数按国籍分与大陸 (含港澳) 配偶人数」(内部統計資料)
- (3) Babiker, I. E., Cox, J. L., & Miller, P. (1980) : The measurement of cultural distance and its relationship to medical consultations symptomatology and examination performance of overseas students at Edinburgh University. *Social Psychiatry*, 15, 109-116.
- (4) Searle, W. & Ward, C. (1990) : The prediction of psychological and sociocultural adjustment during cross-cultural transitions. *International Journal of Intercultural Relations*, 14(4), 449-464.
- (5) Ward, C. & Kennedy, A. (1992) : Locus of control, mood disturbance and social difficulty during cross-cultural transitions. *International Journal of Intercultural Relations*, 16(2), 175-194.
- (6) Ward, C. & Kennedy, A. (1993) : Where's the "culture" in cross-cultural transition?: Comparative studies of sojourner adjustment. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 24(2), 221-249.
- (7) Ward, C. & Kennedy, A. (1993) : Psychological and sociocultural adjustment during cross-cultural transitions: a comparison of secondary students overseas and at home. *International Journal of Psychology*, 28(2), 129-147.
- (8) クォングヨン, パクグンウ (2007) 国際結婚移民女性の精神健康に影響する要因: 全羅南道の国際結婚移民女性を中心として. *社会研究*, 14(2), 187-219.
- (9) パクジョンスク, パクオクイム, キムジンヒ (2006) 国際結婚移民女性の家族葛藤と生活満足度に関する研究. *韓国家庭管理学会誌*, 25(6), 59-70.

- (10) クォンボクソン, チャボヒョン (2006) 農村地域のコシアン (Kosian) 家庭主婦の意思疎通能力と文化的アイデンティティが結婚満足度に与える影響. 韓国社会福祉学, 58(3), 109-134.
- (11) ヤンオクキョン, キムヨンス, イバンヒョン (2007) ソウル居住の国際結婚移民女性の文化適応と社会的支援サービスに関する調査研究. ソウル都市研究, 8(2), 229-251.
- (12) キムオナム (2005) 移民女性の夫婦葛藤の決定要因に関する研究. カトリック大学大学院博士学位論文
- (13) 王良芬 (2004) 台北縣外籍配偶生活適應之探析 - 以板橋市中山社區為例. 社區發展季刊, 105, 246-257.
- (14) 曾嫻芬 (1997) 居留權的商品化: 台灣的商業移民市場. 臺灣社會研究, 27, 37-67.
- (15) 夏曉鵬 (2000) 資本國際化與國際婚姻 - 以台灣的「外籍新娘」現象為例. 臺灣社會研究, 39, 45-92.
- (16) 徐源生 (2003) 兩岸聯姻跨制度婚姻調適之研究 - 以金門縣大陸新娘為例. 銘傳大學公共管理與社區發展研究所碩士在職專班修士學位論文
- (17) 簡孟嫻 (2003) 大陸女性配偶在台生活適應之研究 - 以台中縣市, 彰化縣為例. 彰化師範大學地理學系修士學位論文
- (18) 翁慧雯 (2004) 東南亞外籍女性配偶生活適應之經驗探究. 社區發展季刊, 105, 217-226.
- (19) 林依敏 (2006) 傾聽兩個越籍新娘的心聲. 國立屏東教育大學教育行政研究所修士學位論文
- (20) 呂靜妮, 李怡賢 (2009) 東南亞新移民女性文化適應之經驗歷程. 耕莘學報, 7, 55-63.
- (21) 李明堂, 黃玉幸 (2008) 台灣十年來東南亞外籍配偶研究趨勢分析. 台灣的東南亞區域研究年度論文研討會
- (22) 郭志通 (2005) 大陸女性配偶在臺婚姻衝突歷程研究. 屏東教育大學學報, 23, 199-238.
- (23) 陳亞甄 (2006) 外籍配偶先生的婚姻觀與婚姻生活. 慈濟大學社會工作研究所修士學位論文
- (24) 賴麗珍 (2006) 外籍新娘配偶的父職角色之研究. 國立臺南大學教育經營與管理研究所修士學位論文
- (25) 溫雨蓉 (2007) 跨國婚姻中台灣籍男性之婚姻品質. 慈濟大學社會工作學研究所修士學位論文
- (26) 田晶瑩, 王宏仁 (2006) 男性氣魄與可「娶」的跨國婚姻: 為何台灣男子要與越南女子結婚? 台灣東南亞學刊, 3(1), 3-36.
- (27) 李俊豪, 徐淑瑤, 陳東豪 (2009) 新移民婦女之社會資本, 社會適應與社區意識 - 中國籍與東南亞 籍新移民之比較. 多元文化與公民社會: 劉阿榮編, 14, 363-394.
- (28) Lazarus, R. S. & Folkman, S. (1984) : Stress, appraisal, and coping. New York : Springer Publishing Company.
- (29) Lazarus, R. S. & Folkman, S. (1987) Transactional theory and research on emotions and coping. European Journal of Personality 1 : 141-169.
- (30) 柳漢守, 桐野匡史, 金貞淑, 尹靖水, 筒井孝子, 中嶋和夫 (2007) : 韓国都市部における認知症高齢者の主介護者における介護負担感と心理的虐待. 日本保健科学学会誌, 10(1), 15-22.
- (31) 桐野匡史, 矢嶋裕樹, 柳漢守, 筒井孝子, 中嶋和夫 (2005) 要介護高齢者の介護者の負担感と心理的虐待の関係. 厚生の指標, 52(3), 1-8.
- (32) 唐軼斐, 矢嶋裕樹, 桐野匡史, 種子田綾, 中嶋和夫 (2005) 児に対するマルトリートメント傾向の測定: 日本保健科学学会誌, 7(4), 269-276.
- (33) 唐軼斐, 矢嶋裕樹, 中嶋和夫 (2007) ストレス認知理論を基礎とする児に対するマルトリートメントの発生メカズム. 厚生の指標, 54(4), 13-20.
- (34) Goldberg, D. P., & Hiller, V. F. (1979) : A scaled version of the General Health Questionnaire. Psychological Medicine, 9, 139-145.
- (35) 福西勇夫 (1990) 日本版 General Health Questionnaire (GHQ) の cut-off point. 心理臨床, 3(3), 228-234.
- (36) Kandel DB and Davies M. (1982) : Epidemiology of depressive mood in adolescents. Archives of General Psychiatry, 39, 1205-1211.
- (37) Kaplan SL, Hong GK and Weinhold C. (1984) : Epidemiology of depressive symptomatology in adolescents. Journal of the American Academy of Child Psychiatry, 23, 91-98.

- (38) 川上憲人, 原谷隆史, 金子哲也, 小泉明 (1987) 企業従業員における健康習慣と抑うつ症状の関連性. 産業医学, 29, 55-63.
- (39) Craig TJ and Van Natta PA. (1979) : Influence of demographic characteristics on two measures of depressive symptoms : The relation of prevalence and persistence of symptoms with sex, age, education, and marital status. Archives of General Psychiatry, 35, 149-154.
- (40) Hirschfeld RMA and Cross CK. (1982) : Epidemiology of affective disorders. Archives of General Psychiatry, 39, 35-46.
- (41) Zung WWK. (1967) : Depression in the normal aged. Psychosomatics, 8, 287-292.
- (42) 高倉実, 平良一彦, 新屋信雄, 三輪一義 (1996) 高校生の抑うつ症状の実態と人口統計学的変数との関係. 日本公衆衛生雑誌, 43(8), 615-623.
- (43) Schoenbach VJ, Kaplan BH, Grimson RC and Wagner EH. (1982) : Use of a symptom scale to study the prevalence of a depressive syndrome in young adolescents. American Journal of Epidemiology, 116, 791-800.
- (44) Garrison CZ, Schluchter MD, Schoenbach VJ and Kaplan BK. (1989) : Epidemiology of depressive symptoms in young adolescents. Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry, 28, 343-351.
- (45) 増地あゆみ, 岸玲子 (2001) 高齢者の抑うつとその関連要因についての文献的考察. 公衆衛生誌, 48, 435-448.
- (46) 藤野善久, 堀江正知, 寶珠山務, 筒井隆夫, 田中弥生 (2006) 労働時間と精神的負担との関連についての体系的文献レビュー. 産業衛生, 48, 87-97.
- (47) 三浦理恵, 青木邦男 (2009) 大学生の精神的健康に関連する要因の文献的研究. 山口県立大学学術情報, 2, 175-183.
- (48) 岡田節子, 齋藤友介, 中嶋和夫 (2001) 保育士の職場ストレス認知の構造化. 保育学研究, 39(2), 73-79.
- (49) 佐藤ゆかり, 渋谷久美, 中嶋和夫, 香川幸次郎 (2003) 介護福祉士における離職意向と役割ストレスに関する検討. 日本社会福祉学, 44(1), 67-78.
- (50) 中嶋和夫, 齋藤友介, 岡田節子 (1999) 母親の育児負担感に関する尺度化. 厚生学の指標, 46(3), 11-18.
- (51) 岡田節子, 荒川裕子, 種子田綾, 中嶋和夫 (2004) 育児負担感と精神的健康の関係. 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 17, 115-126.
- (52) Sadanori Higashino, Takako Tsutui, Masafumi Kirino, Yuki Yajima, Yong-Taek Ki and Kazuo Nakajima (2003) : Development of the Family Caregiver Burden Inventory (FCBI). International Journal of Welfare for the Aged, 9, 1-14.
- (53) Sadanori Higashino, Han-su Yu, Masafumi Kirino, Uuki Yajima, Sumiei Tsutui, Takako Tsutui, Kazuo Nakajima (2005) : The Relationship between Mental Health and Care Burden in the Primary Caregivers of Seniors requiring Support Care. 日本保健科学学会誌, 8(3), 147-153.
- (54) Yuki Yajima, Takako Tsutui, Kazuo Nakajima, Hui-Ying Li, Tomoko Takigawa, Da-Hong Wang and Keiki Ogino : The Effects of Caregiving Resources on the Incidence of Depression over One Year in Family Caregivers of Disabled Elderly. Acta Med Okayama, 61, 71-80.
- (55) 森本美智子, 中嶋和夫, 高井研一 (2002) 慢性閉塞性肺疾患患者の機能障害ならびにストレス認知と精神的健康との関係. 日本看護研究学会雑誌, 25(4), 17-31.
- (56) 森本美智子, 高井研一, 中嶋和夫 (2005) 病気や生活に関する不安認知が精神的健康に及ぼす影響. 日本看護研究学会雑誌, 28(2), 51-58.
- (57) 矢嶋裕樹, 間三千夫, 中嶋和夫, 河野淳 (2004) 聴力低下ストレス認知と精神的健康度. Audiology Japan, 47(3), 149-156.
- (58) Yuki Yajima, Masafumi Kirino, Aya Taneda, Yong-Taek Kim, Kazuo Nakajima (2004) : The Influence on Depression of Perceived Stressful Environments in Institutional Settings. International Journal of Welfare for the Aged, 10, 55-65.

Stress Related to Daily Life of Multi-cultural Family Husband in Taiwan

Jungsoo Yoon, Hideki Momose, Yasuhiro Kuroki and Kazuo Nakajima

There is a purpose in clarifying relevance of 'Irritated feeling' (whether it is negative stress) and the mental health (a stress reaction) of the multi-cultural family husband of Taiwan. A objects of this investigation are 200 multi-cultural family husband who live in Taipei city, Takao city, Taipei prefecture, Toyen prefecture. This investigation contents composed of attribute irritated feeling related to daily life and mental health. Put four variables (difference of the age between husband and wife, husband's income, marriage continuance, wife's learning condition of Taiwanese) as a control variables, and analyzed suitability of causation model's data which are three kinds of irritated feelings (negative feelings towards wife, negative feelings towards family and neighbors, economic pressure) related to husband's daily life as independent variables, mental health condition measured with GHQ-12 as dependent variable with structure equation modeling.

As a result, each causation model which examined above-mentioned factor statistically fitted in with meaningful standard data. From the above result, place stress related to daily life with living problem or living needs from a social welfare studies point of view for multi-cultural family husband's maintenance and promotion of mental health, and was suggested to take an active hand.

Key words : Taiwan, Multi-cultural family's husband, Stress, Negative feeling, Mental health